

歌 詞 大 意

祈り Gebet

主よ 御心のままにお授け下さい
愛か 苦しみか
あなたがなさる御業であれば
いずれであっても私は幸せです

でもその喜びにしろ その悩みにしろ
私に与えずぎぬようになさってください
その慈悲深い心づもりが
中庸でありますように

散歩 Fussreise

切りたての新しいステッキを持って
僕は朝早く いくつもの森をぬけ
丘を登りそして下っていった
すると小鳥が茂みの中から囀り飛び回り
そして金色の葡萄の房が
差し込んでくる朝日の中で輝いていた
その時僕は思うのだ
昔アダムが同じ春や秋の輝きを
神に祝福されたエデンの園の朝日を
享受したのだったと

だからアダムよ 厳しい聖人が言うように
おまえはそんなに悪くはないぞ
だからいつも愛し 讃えよ
歌え そして誉めたたえよ
永遠に新しい天地創造の日々を生きるように
おまえを創造し 守護したもう神を

神の恩恵を受けつつも
僕の全ての人生が
このようにさわやかな汗をかく
朝の散歩のようであってほしい

少年とみつばち

Der Knabe und das Immlin

丘の上のぶどう畑で
小さな小屋が風にあおられている
戸も窓も閉めきって
時がゆっくりと過ぎてゆく
その日は蒸し暑く
小鳥たちも静かで
一匹の蜜蜂だけが向日葵のまわりを
羽音をたてて飛んでいる

僕の愛しい娘の庭には
可愛らしい蜂の巣箱がある
おまえはそこから来たのかい？
彼女が使わしたのかい？

「いいえ少年よ 違います
ぼくは誰の使いでもありません
あの子はまだ愛など知らないし
あなたをまだ知らないでしょう

まだ学校も出ていない少女に
何がわかると言うのでしょうか！
あなたの愛しい可愛い娘は
まだお母さん子なのです

ぼくはあの子に蜜蝋と蜂蜜を運びます
さようなら！
もう1ポンドも集まったし
あの子も口の中もどんなに喜ぶでしょう」

ああ あの娘に伝えておくれ
僕はもっと甘いものを知っている事を
抱き合い 口づけすることほど
この世に素敵なことはないということを！

ヴァイラの歌 Gesang Waylas

おまえオルブリートよ
遠くから輝いている我が国よ！
海はおまえの輝く浜辺に霧を立ちのぼらせ
神々の頬を濡らす
太古の波が打ち寄せて若返る島よ！
王たちも神々しいおまえの前では
ひざまずき 忠誠を誓うのだ

旅先で Auf einer Wanderung

ある親しみやすい街に僕は入っていった
夕陽が路を赤く染めていた
その時 開いた窓から
素敵な花越しに金の鈴の音がきこえてきた
そしてナイチンゲールを思わせる歌声が
花々はふるえ そよ風はたち
バラも赤く燃えるように輝きだした

驚きながら喜びにしばらく立ちすくんだ
いつの間に門の前にやってきたのか
それさえ憶えていない
ああ ここはなんて世界が輝いていることか
空は夕焼け雲が真っ赤に広がり
あとにした街は金色の霞につつまれていた
榛の木の繁る小川のせせらぎの音
谷間に響く水車の音
僕は道を見失ったようだった
ああミュージズよ 主への愛の息吹が
僕のところにそっとふれてきたのだった！

“ミケランジョロの詩による3つの歌曲”

Drei Gedichte von Michelangelo

わたしはしばし思う

Wohl denk' ich oft

わたしはしばし思う 昔のことを
わたしが貴女を愛する以前のことを
だれもわたしを認めることはなかった
わたしには時を失っていくようなものだった

わたしは考えてみた
いっそ歌に生きてゆこうかと
そしてこの世間の人々から逃げ出すことを
しかし今 わたしはその世から賞賛されたり
非難されたりしている
今や私の存在を全ての人が知っているのだ！

この世に生を受けたものは全て滅びる

Alles endet, was entsteht

この世に生を受けたものは全て滅びる
すべてまわりのものは消えてゆく
それは時が飛び去り太陽は見ているからだ
すべてまわりのものが消えてゆくのを
思いも 語りも 痛みも そして喜びも
そしてわれら子孫があっても
昼間の影のように消えるのだ
風にそよぐ霞のごとくに
お前たちのようにわれらも人間であり
喜んだり悲しんだりした

そして今われらは命を失いここにいる
お前たちが見ているようにただの土となって
この世に生を受けたものは全て滅びる
すべてまわりのものは消えてゆく

わたしの魂はかんじえようか

Fühlt meine Seele

わたしの魂はかんじえようか
神が創り出した光を？
それはわたしの心に呼び起こされた思い出の
この世の別の美しさの光か？
それは響きか 夢か
想像を超えた赤熱の苦しみが
眼と心を一度に満たし
わたしは涙にくれさせられるのか？
わたしにはわからない
わたしが望み 感じ わたしを導くものは
わたしの中にはない：

教えてくれ わたしはどうすればよいか？
わたしに示されるものはただ愛だけ
あなたを知ってからその中に入って行った
わたしを駆り立てるのは
「はい」と「いいえ」という
甘美なものと苦渋との間のもの
それは 女神よ 貴女の瞳のせいなのだ

“さすらう若人の歌”

Lieder eines fahrenden Gesellen

愛しい女の結婚式の日に

Wenn mein Schatz Hochzeit macht

愛しい女の結婚式の日
楽しい結婚式の日は
僕には哀しい日である
僕は僕の暗い部屋に籠もる
そして彼女のことを思い泣いた
愛しい彼女のことを思い泣いた
蒼い花よ！ 萎れないでくれ！
優しい小鳥よ おまえは緑の原で歌う
「ああ なんてこの世は美しいんだ
ツイキュー ツィキュー」 と
歌わないでくれ！ 咲かないでくれ！
春はすでに終わってしまった
夜 僕が眠りにつこうとする時
すべての歌も消えていった
僕はこの苦しみを想う

今朝 野原をとおっていった時

Ging heut' morgen über's Feld

今朝 野原をとおっていった時
草の葉にはまだ露がおり
陽気そうなるそ鳥が語りかけてきた
「おはよう ねえ君
素敵な日になりそうじゃあないかい？
素晴らしい日に ツィンク
この世はなんて素晴らしいんだろう」

野原に咲いている釣鐘草も
陽気に機嫌の良いところを見せている
鈴を鳴らしている 響け 響けと
朝の挨拶を呼びかけてきた
「素敵な日になりそうじゃあないかい？
クリンクリン 気持ちがいいなあ
この世はなんて素晴らしいんだろう
ハイヤー」
そして陽の光をあびて
この世がいっせいに燦めきはじめた
すべてが音と彩りをえた陽の光をあびて
花も鳥も 大きいものも小さいものも
「おはよう！ 素敵な日じゃあないかい？
ねえ そうだろう？ 素敵な日だね！？」
そして僕も幸せになれるというのか！？
いや！ いや！ 僕は思う
僕には花が咲き誇ることはない！

灼熱のナイフを僕は持っている

Ich hab' ein glühend Messer

灼熱のナイフを僕は持っている
胸の中に一本のナイフを ああなんて苦しい
それは深く突き刺さっている
すべての喜び すべての楽しみにそれは深く
ああ なんていう邪悪な客か
片時も休まず 片時も憩わない
昼間も 夜も僕が眠っている時でさえ
おお 痛い！
天を見ると時そこに二つ青い瞳が見える！
おお 痛い！
僕が黄金色に輝いた野原を歩くと
遠くに金髪の髪が風になびくのが見える！
おお 痛い！
僕が夢から醒めると
彼女銀のように響く笑い声が聞こえる
おお 痛い！
僕は黒い棺の中に横たわって
もう二度と目を開きたくはない！

彼女のふたつの青い瞳が

Die zwei blauen Augen

彼女のふたつの青い瞳が
僕を遠い世界へと追いたてた
すべての愛する場所に別れを
告げなくてはならなくなった！
ああ 青い瞳よ！
なぜ僕を見つめたのか？
永遠の悩みと傷ついた心だけが残った！
僕はひとり静かな夜の中を
暗い荒野をぬけて出て行った
別れの挨拶を僕に告げるものもなく！
さらば！ 僕の道連れは愛と悩みだけ！
道ばたに菩提樹が立っていた
そこで僕は初めて眠り休んだ！
菩提樹の木の下で
花びらが体の上に雪のようにふりかかった
僕は人生がどうであったか忘れていった
すべてがふたたび素晴らしくなっていった
なにもかも！ 愛も悩みも
この世も 夢も すべて！

“子供の不思議な角笛”より

Des Knabenwunderhorn

少年鼓手 Der Tamboursg'sell

僕は哀れな太鼓打ち！
僕をみな営倉から引っぱり出す
もし鼓手のままでいたら
牢屋に入れられることもなかった

おお 高くそびえる絞首台よ
おまえはなんて恐ろしい姿をしているんだ
おまえなんかもう見たくない
なぜなら僕もすぐにそこに行くからさ
もし兵隊たちが僕のそばで野営せずに行進し
そして僕がどんな奴だったか尋ねたら
親衛中隊の鼓手だったと答えてやってくれ

おやすみ大理石よ 山よ 丘よ
おやすみ士官殿 分隊長殿
そして擲弾兵たちよ 僕は明るい声で叫ぶ
みんなの前より去っていきますと
おやすみ！

歩哨の夜の歌

Der Schildwache Nachtlied

僕はまったく面白くない！
仲間がみな眠ってるっていうのに
こうして僕は起きてなくちゃいけない
哀しいこった！
「ねえ坊や 哀しまなくたっていいのよ！
あなたを待ってるわよ
バラの庭の中 緑のクローバーの中で！」

緑のクローバーのところなんか行かないぞ！
武器の庭 槍の花でいっぱいのところ
僕は立たされてるんだ！
「戦場にいるのなら
神様のご加護がありますように
神様のお恵みはすべてに満ちているのよ
それを信じる者にとっては」

信じてるやつは 遠くにいる
それは王様さ！
そいつぁ皇帝さ！
彼が戦争を指揮してる
待て！そこにいるのは誰だ？ 離れろ！
誰がここで歌ってるんだ？
誰がこんな時間に歌ってるんだ？
ヤケになってる歩哨の兵士が
そいつを歌ってるのさ 真夜中に
真夜中さ！ 歩哨が！

魚に説教するパドゥアの聖アントニウス

Des Antonius von Padua Fischpredigt

アントニウスは教会に説教しに来た
しかしそこは誰もいなかった
そこで川へと出かけ魚に説教をしはじめた
魚たちは尻尾で水面を打ってよるこんだ
お日さまは明るく光の中で煌めいていた
卵を抱いた鯉がみんなをこっちへ集め
口をパクパクさせながら一生懸命聴いている
どんなお説教も魚たちが
こんなに気に入った事はなかった

いつも喧嘩してる口のとんがった川カマスも
偉い人の話を聞こうと急いで泳ぎやってきた
あの夢想家でいつも断食している魚
つまり タラの干物までが、
お説教を聴きにやってきた
どんなお説教もタラの干物が
こんなに気に入った事はなかった

善良なウナギやチョウザメ
この高貴な美食家たちまでもが
わざわざお説教を聴くきになった
カニたちやカメたちは
いつもはゆっくりとお使いをするのに
聴こうと急いで川底から這い上がった
どんなお説教もカニが
こんなに気に入った事はなかった

大きな魚も小さな魚も
高貴なもの下賤なもの頭をうなずかせている
まるで分別ある生き物みたいに
神様の御意志を受けてこの説教を聴いている

説教は終わりみんなは元へと戻っていった！
チョウザメは盗人のままだし
ウナギはいつも恋ばかりして
お説教は気に入った
みんなはまた元のまま
カニは戻って行った

タラは太ったまんま
鯉は大食らい
お説教など忘れてしまった
お説教は気に入った
やつらはみんな元のまま
いや説教は気に入った！

高き知性への讃歌

Lob des hohen Verstandes

昔 ある深い谷間で
カッコウとナイチンゲールが
歌くらべをする事になりました
上手く歌った方が勝ちで賞を得る事となった
カッコウが言った
もし良ければ私が審判を選ぼう
ロバに頼もう
彼なら大きな二つ耳を持っているし
良く聞こえ 立派な判断ができるに違いない

二人は直ぐに審判のところに飛んでいき
事の次第を告げると ロバは早速
さあ歌い始めよ といった
ナイチンゲールは美しく歌った
ロバは言った おまえはわしを混乱させる
イーヤ イーヤ
わしには耐えられん
カッコウは待ってましたとばかりに
3度 4度 5度の音程を歌い始めた
ロバは気に入って そしていった
よし よし わしの審判を言い渡すぞ
ナイチンゲールよ おまえは良く歌った
だがカッコウよ おまえのコラールは
拍子を崩さず歌い続け
わしの高き知性に訴えた
これは国一つ分に値する
よっておまえを勝ちとする

(訳：河野克典)